

## 第6章

# 自粛する若者とは誰か

### 6.1 はじめに

#### (1) 自粛要請と社会学

新型コロナウイルス感染症をめぐる政府や自治体の対応で目立ったのは、人々への要請やお願いである。感染した時に重症化するリスクや、後遺症のリスクなどを説明するとともに、感染拡大防止のための行動自粛が要請された。例えば、大人数での会食、帰省や旅行による都道府県をまたぐ移動、不要不急の外出などの自粛要請がなされた。ただし、あくまで要請やお願いであるため、たとえ応じなかったとしても法的に罰せられることはなく、応じたとして協力金がもらえるわけでもない<sup>1)</sup>。

しかしながら、これまでの経過を見れば、感染者が増加するたびに行動の自粛が要請され、その後、感染者が減少するという流れを繰り返してきた。すなわち、要請により、新型コロナウイルス感染症のリスクを理解して、感染対策を自ら強化した人々が多くいたということであろう。法的に罰せられるわけでもなく、経済的にメリットがあるわけでもないのに、なぜ多くの人々が行動を自粛したのか。この謎を解くためには社会学的な視点が欠かせない。

なぜならば、社会学は、法律やお金には還元できないが、人々の行動に影響を与える「何か」について研究してきた学問だからである。この「何か」には、社会の構造であるとか、常識や価値観といったものが含まれる。人々が新型コ

コロナウイルス感染症のリスクを理解し、自粛の要請に応じた背後にも、社会構造上の理由や、何らかの常識、価値観が存在しているかもしれない。そこで本章では、社会学的な視点から行動自粛の背後にある要因を明らかにしていく。

## (2) 常に注目される若者

議論を進めるにあたって、本章では、若者の意識と行動に論点を絞りたい。というのも、特に強く自粛を要請されていたのが、若者だからである。新型コロナウイルス感染症のリスクを小さく考えた若者たちが、飲み会や食事会を行っていると言われ、そのことが感染拡大の原因の1つといわれてきた。これが若者への対策が重視されてきた理由である。

さかのぼれば、コロナ禍が始まってすぐの段階で、軽症や無症状の若者が感染を拡大している可能性が指摘されていた。少しして、ホストクラブやキャバクラといった夜の街でのクラスターが多発し、2020年7月から8月にかけてのいわゆる第2波では、若者の食事会や飲み会が感染拡大の要因とされた(表6-1)。2021年になっても若者の行動は注目され、例えば、酒類を提供する飲食店に休業要請が出たときには、若者の路上飲みが問題となった(表6-1)。このように、コロナ禍では常に若者の意識と行動が問題視され、行動の自粛が繰り返し呼びかけられた。

表6-1 新型コロナウイルス感染症と若者に関する新聞記事の見出し

「夜の街」にクラスター対策有効? 若者から感染拡大防ぐ  
(『読売新聞』2020年7月18日, 東京朝刊)

若者中心、広がる感染—3日連続最多更新の愛知  
新型コロナ20~30代が7割 目立つ繁華街関連 広い行動範囲  
調査に協力せぬ人も  
(『朝日新聞』2020年7月24日, 朝刊, 名古屋本社)

路上飲みの若者「結局、コロナって?」緊急事態宣言  
大阪・ミナミ  
(『朝日新聞』2021年7月31日, 朝刊, 大阪本社)

若者 路上飲み 4度目緊急事態初日  
(『読売新聞』2021年8月3日, 大阪朝刊)

先にも述べたように、感染拡大の後には必ず感染者数が減少している。したがって、このような呼びかけによって、多くの若者が行動を自粛したのだと思われる。本章では、特に話題となった若者の飲み会や食事会に注目し、自粛のメカニズムを明らかにしたい。また、若者の飲み会や食事会を問題視するときには、若者が新型コロナウイルス感染症のリスクをどれくらい大きく考えているのか、という点も議論となった。そこで、新型コロナウイルス感染症のリスクに関する意識にも注目しながら、自粛のメカニズムを分析していく。なお、以降では、飲み会や食事会をまとめて会食と記述する。

### (3) 自粛要請と若者論

若者の意識と行動を分析するにあたり、若者論の知見を使っていきたい。若者論は、社会学の中にある研究分野の1つで、これまでも若者を分析する方法について多くの知見を積み重ねてきた。

例えば、近年の若者論では、現代の若者は一枚岩ではない、ということが指摘されている。現代の若者を一括りにすることは困難であり、若者内の差異に注目する必要があるという（浅野 2016；吉川・狭間編 2019）。会食の自粛についても、すべての若者が自粛をしたわけではない。リスクの認知についても、若者の全員が、新型コロナウイルス感染症のリスクを大きく考えていたわけではないだろう。自粛した若者としなかった若者、リスクを大きく考えた若者と小さく考えた若者。この違いは何に起因するものなのか。若者内の差異に注目する視点が必要である。そこで本章では、会食を自粛する若者とは誰なのか、新型コロナウイルス感染症のリスクを大きく考えている若者とは誰なのかを分析する。これにより、若者が会食を自粛するメカニズムを明らかにすることができるだろう。

## 6.2 違いを生む要因

論点をより明確にするために、これまで行われてきた研究をみてみよう。

### (1) 社会的属性による違い

まずは、社会的属性による違いについて考える。前節で述べたように、今の若者を語る上で、かれらを一括りにすることはできない。そこで先行研究では、若者の社会的属性に注目して分析を行ってきた。同じ若者でも、男性／女性、高学歴層／低学歴層、正規職／非正規職／無職、高収入層／低収入層、一人暮らし／同居家族あり、のような違いがある。これらの違いが意識や行動に影響を及ぼしていることは想像に難くないだろう。実際、ジェンダーや教育、労働、消費、政治といった様々な分野についての若者の意識や行動は、社会的属性によって異なっている（吉川・狭間編2019）。

また、リスク認知についても、社会的属性による違いが指摘されている。例えば、原子力発電所やSARSといった様々な項目からリスク認知の指標を作成して分析を行った、岸川洋紀らの研究がある。この研究では、個人に対するリスクと、社会に対するリスクとに分けて分析が行われている。その結果、個人に対するリスクでは、学歴の高い人、15歳以下の子供がいる人、大都市に居住している人がリスクを大きく考え、社会に対するリスクでは、女性や年齢の高い人がリスクを大きく考えていることが明らかになっている（岸川ほか2012）。

また、犯罪リスクの認知について日米比較を行った阪口祐介によれば、アメリカでは、女性、年齢の高い人、収入の低い人で犯罪被害のリスクを大きく考えやすく、日本では、若い女性、幼い子供がいる男性、ホワイトカラーの女性、学歴の高い人で犯罪被害のリスクを大きく考えやすいという（阪口2008）。

これらの研究結果からは、たとえ同じ事柄であっても、どれくらいリスクがあるか考えるのかは、社会的属性によって異なるということがわかる。であるならば、新型コロナウイルス感染症のリスクをどれくらい大きく考えるのかについても、社会的属性によって異なる可能性は十分にある。また、コロナ禍における会食の自粛とは、新型コロナウイルス感染症の感染リスクを回避する行動と捉えられる。したがって、会食を自粛するかどうかにも社会的属性が影響している可能性がある。

## (2) 社会意識による違い

続いて、社会意識による違いについて考える。

まず、若者の権威主義的態度について考えてみたい。権威主義的態度とは、権威に対する服従性をあらわしており、かみ砕いて言えば、「偉い人の言うことには従っておこう」という態度のことである。このコロナ禍では、総理大臣や自治体の首長、あるいは専門家らが、メディアの前で自ら自粛を要請する姿が目立った。これらの権威ある人々が繰り返し新型コロナウイルス感染症のリスクを説明し、自粛を要請したことによって、若者は行動を自粛したのかもしれない。

また、若者論では、若者の権威主義的態度が近年強まっていることが指摘されている（友枝 2015；濱田 2019など）。かつては、年齢の高い人ほど権威主義的態度が強いという傾向が見られたが、2010年代に入ってこの関連は逆転し、今では、若者のほうが強い権威主義的態度を持っている（濱田 2019など）。この傾向は、若者のまじめ化とも関連して議論されている（平野 2015；杉村 2015など）。法律による罰則や経済的なメリットがあるわけでもないのに、多くの若者がまじめに自粛の要請にしたがったのは、かれらの持つ権威主義的態度があったからなのかもしれない。本章では、権威主義的態度の強い若者が新型コロナウイルス感染症のリスクを大きく考え、会食を自粛するのかどうかを検証する。

次に、若者の同調性について考えてみたい。現代の若者は、場の空気を読みながら常に周囲の評価を気にしているといわれている。土井隆義によれば、価値観が多様化した現代社会では、普遍的で画一的な判断の拠り所がなく、自らの判断が正しいのかどうか、周囲の評価を確認する必要があるからだという（土井 2014ほか）。そのような状況では、自らの主張を押し通すよりも、周囲の人々に合わせて行動する若者は多いと思われる。

コロナ禍では、様々な主張が飛び交い、何が正しいのかが分からない状況で、個々人が判断を迫られる場面が多くあった。本章で議論している会食の自粛についても、結局、会食をしてもよいのか、どうすれば会食してもよいのかがよく分からないまま、時が経過している。まさに、自らの判断が正しいのかどう

か、周囲の評価を確認しなければならない状況だといえる。したがって、皆が新型コロナウイルス感染症を怖がり、自粛しているから、空気を読んで自らも新型コロナウイルス感染症を怖がり、自粛するという若者がいたと思われる。実際、若者に限った研究ではないが、コロナ禍で人々がマスクを着用するのは、他の人々がマスクを着用しているのに合わせているからだという知見もある(Nakayachi et al. 2020)。本章では、周囲の人々に合わせて行動しようという考え方を同調性と表現し、同調性の強い若者が新型コロナウイルス感染症のリスクを大きく考え、会食を自粛するのかどうかを検証する。

### 6.3 検証方法

#### (1) 使用するデータ

使用するのは、「2020年若者の意識と暮らしに関する調査 (YPAL2020)」から得られたデータである。この調査は、筆者らが行ったインターネット調査で、2020年8月25日から8月27日にかけて実査が行われた。調査対象者は、委託先の調査会社が持つモニターのうち、日本全国に住む、学生ではない25～39歳の男女である<sup>2)</sup>。何歳までが若者なのかという定義については、明確な決まりがあるわけではない。しかし近年では、30代までが若者であると定義されることが多い。コロナ禍でも「20代30代」をまとめて若者として扱うことが多かった。そのため、本章でもその定義に従い39歳までを若者とした。また、本章では若者自身の社会的属性に注目するため、学生ではなく、社会に出た後の若者を分析する必要がある。そのため、学生を除いた25歳を下限に設定している。

サンプルサイズは500人を予定し、性別および学歴(大卒/非大卒)が、それぞれ半分ずつになるようにサンプルの割り付けを行った<sup>3)</sup>。最終的には556人(大卒男性138人、非大卒男性135人、大卒女性147人、非大卒女性136人)から有効回答を得た。分析に用いる変数が欠損値になっているケースは分析から除き、最終的に分析するケースは431人である<sup>4)</sup>。

2020年の8月末は、若者が感染拡大の原因とされた第2波の終盤にあたり、

地域によっては飲食店への休業要請が解除されていった時期でもある。様子を見て自粛を続ける者がいる一方で、自粛をやめる者が現れた時期だといえる。したがって、自粛する若者としらない若者の違いを明らかにしたい本章に適した調査データであると考えている。

## (2) 使用する変数

会食の自粛については、「飲み会や食事会は、なるべくしないようにしている」かどうかを尋ねた項目（以下、会食自粛）を使用する。回答選択肢は、「よくあてはまる／ややあてはまる／どちらともいえない／あまりあてはまらない／まったくあてはまらない」の5つである。「よくあてはまる」=5～「まったくあてはまらない」=1と数値を与え、数値が高いほど会食を自粛していることを示すようにしている。

新型コロナウイルス感染症のリスクをどれくらい大きく考えているのかという意識については、「新型コロナウイルスは無症状や軽症であることも多いので、過度に心配する必要はない」と思うかどうかを尋ねた項目（以下、新型コロナリスク認知）を使用する。回答選択肢は会食自粛と同じであるが、こちらは「よくあてはまる」=1～「まったくあてはまらない」=5と数値を与え、数値が高いほど新型コロナウイルス感染症を過度に心配する必要はないと「思っていない」ことを示すようになっている。つまり、数値が高いほど新型コロナウイルス感染症のリスクを大きく考えていることを意味している。

若者の社会的属性については、性別、年齢、学歴、就業状態、収入、同居家族の有無を使用する。年齢は調査時の満年齢を、学歴は教育年数を使用する。就業状態については従業上の地位を「正規職／非正規職／無職」の3カテゴリに分類する<sup>5)</sup>。収入には世帯収入を使用する<sup>6)</sup>。

権威主義的態度については、「権威のある人々にはつねに敬意を払わなければならない」と思うかどうかを尋ねた項目を使用する。同調性については、「自分の意見と違って、多数派の人々の意見には従う方が無難である」と思うかどうかを尋ねた項目を使用する<sup>7)</sup>。回答選択肢は、どちらも「そう思う／どちらかといえばそう思う／どちらともいえない／どちらかといえばそう思わ

表6-2 分析に使用する変数の記述統計

変数	割合 (%)		平均	標準偏差
女性	50.9	会食自粛	3.4	1.2
正規職	51.7	新型コロナリスク認知	4.3	1.0
非正規職	19.7	年齢	34.2	3.9
無職	28.5	教育年数	14.0	2.3
同居家族あり	81.2	世帯収入		
		対数変換前	550.4	367.6
		対数変換	6.0	1.1
		権威主義的態度	2.6	1.2
		同調性	3.1	0.9
n	431			

出所：YPAL2020データより著者作成。

ない／そう思わない」の5つである。「そう思う」＝5～「そう思わない」＝1と数値を与え、数値が高いほど権威主義的態度、同調性が強いことを示すようにしている。使用する変数の記述統計については表6-2に示している<sup>8)</sup>。

### (3) 分析方針

次節では、まず会食自粛と新型コロナリスク認知の回答分布を確認する。その後、会食自粛を従属変数とした重回帰分析を行う。社会的属性変数と権威主義的態度、同調性は独立変数とし、それらが会食自粛に与える影響を分析する。また、新型コロナリスク認知も独立変数として使用する。これにより、そもそも新型コロナウイルス感染症のリスクを大きく考えていることが会食の自粛につながっているのかを確認する。そして、最後に、その新型コロナリスク認知を従属変数、社会的属性変数、権威主義的態度、同調性を独立変数とした重回帰分析を行うことで、どのような若者が新型コロナウイルス感染症のリスクを大きく考えているのかを明らかにする<sup>9)</sup>。

## 6.4 新型コロナリスク認知だけでは説明できない会食自粛

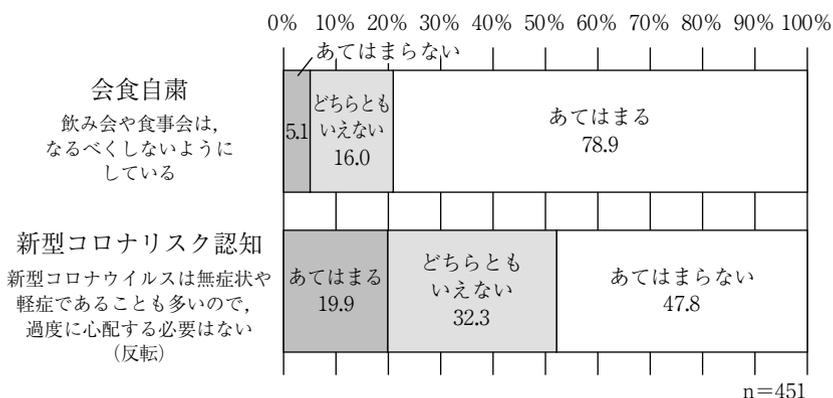
### (1) 釣り合わない会食自粛と新型コロナリスク認知

まずは、どれくらいの若者が会食を自粛し、新型コロナウイルス感染症のリスクを大きく考えているのかを見てみよう（図6-1）。なお、図6-1では「よくあてはまる」と「ややあてはまる」を合わせて「あてはまる」とし、「まったくあてはまらない」と「あまりあてはまらない」を合わせて「あてはまらない」としている。

会食自粛については、自粛している若者が78.9%となっている。他方、自粛していない若者は5.1%と少なく、大多数の若者が会食を自粛しているといえる。ただ、どちらもいえないという若者も16.0%おり、やはり、はっきりと自粛しているといえない若者も一定数いることが分かる。

新型コロナリスク認知については、新型コロナウイルス感染症のリスクを大きく考えている若者は47.8%に留まっている。他方、過度に心配する必要はないという若者は19.9%、どちらもいえないという若者は32.3%いる。や

図6-1 会食自粛と新型コロナリスク認知の回答分布



出所：YPAL2020データより著者作成。

は、新型コロナウイルス感染症のリスクを大きく考えている若者が一番多いものの、過半数には届いておらず、会食を自粛している若者と比べれば少ない。

以上の結果から、若者の多くは会食を自粛し、新型コロナウイルス感染症のリスクを大きく考えていることが分かった。しかしながら、2つの分布の比較からは、新型コロナウイルス感染症のリスクを大きいと感じていないものの、自粛している若者もいることが分かった。

## (2) 会食自粛と新型コロナリスク認知を規定するもの

続いて、重回帰分析の結果を見てみよう。

まず、会食自粛を従属変数とした重回帰分析の結果が表6-3である。調整済み決定係数 $R^2$ 値は.179(1%水準で有意)であった。社会的属性変数について見てみると、無職( $B=.331^{**}$ )と同居家族あり( $B=.373^{**}$ )に有意な結果が出て

表6-3 会食自粛の規定要因

	B	SE	$\beta$
定数	2.078 <sup>**</sup>	.545	
女性	-.004	.093	-.002
年齢	.002	.011	.007
教育年数	-.004	.020	-.008
正規職(ref)			
非正規職	.110	.119	.046
無職	.331 <sup>**</sup>	.111	.155
世帯収入(対数変換)	.054	.043	.063
同居家族あり	.373 <sup>**</sup>	.119	.151
権威主義的態度	.021	.046	.023
同調性	.156 <sup>**</sup>	.051	.151
新型コロナリスク認知	.257 <sup>**</sup>	.038	.306
調整済み $R^2$		.179 <sup>**</sup>	
n		431	

(注1) B: 偏回帰係数, SE: 標準誤差,  $\beta$ : 標準化偏回帰係数

(注2) <sup>\*\*</sup> $p < 0.01$

出所: YPAL2020データより著者作成。